

contents

●個展宣伝
わらお びびし

●漫画「CARNIVAL」
ヒラチ フミタカ

小説

「考えぬヒント」

親方

no.4

アート、イラスト、漫画
なんでもありのフランク電子雑誌

四季をめぐって、いっしゅうねん

frankly
FREE PAPER



2013

1 -January- the first month of the year.

sun mon tue wed thu fri sat

				1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12		
13	14	15	16	17	18	19		
20	21	22	23	24	25	26		
27	28	29	30	31				

2 -February- the second month of the year.

sun mon tue wed thu fri sat

		1	2			
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28		

3 -March- the third month of the year.

sun mon tue wed thu fri sat

		1	2			
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

keita highyani



参加募集要項

frankly exhibition の作品展示や、このフリーペーパーに参加してもらえる人を募集しています。

共通テーマは「**法兰クリー**」という言葉だけ。

意味は、【率直に、ありのまま、包み隠さず】

意味があるもの無いもの。作りたいものを作る、書きたいことを書く。その率直さを大切にして制作したい人に、ページや、グループ展という形で場所を提供、共有したい集まりです。

希望の方は**作品概要**や、**プロフィール**などを下記のメールアドレスまでお送りください。

franklyex@gmail.com

●データやりとりは Skype 使える方だとラクです

フリーペーパー

- 共通テーマは「法兰クリー」
- フォト、オリジナルイラスト作品、創作、エッセイ、評論、内容は自由です。
(公序良俗に反するものなどは御勘弁・閲覧に関して全年齢を対象とするもの)
- メールで画像やテキストさえ送ることが可能なら参加可能です
- 会費、コスト等は0です
- ページ制限は1~10程度です。内容によってはそれ以上も可能です。

グループ展

- 共通テーマは「法兰クリー」
- 会場費、設営にかかるお金などは参加人数で割ることになります
- 現状は宮城県仙台での展示のみですが、参加者や希望次第でどこでもOKです
- 絵画、イラスト、絵本、小物、彫刻、写真、内容は自由です。



ART&CAFE



GAONG企画

わらおびびし 個展

2012年12月13日～12月25日

GAONG企画 わらおびびし 個展

会期 2012年12月13日～12月25日

漫画はインスピレーションと想像力と場面構成力。

漫画を美術的可能性からひも解き、

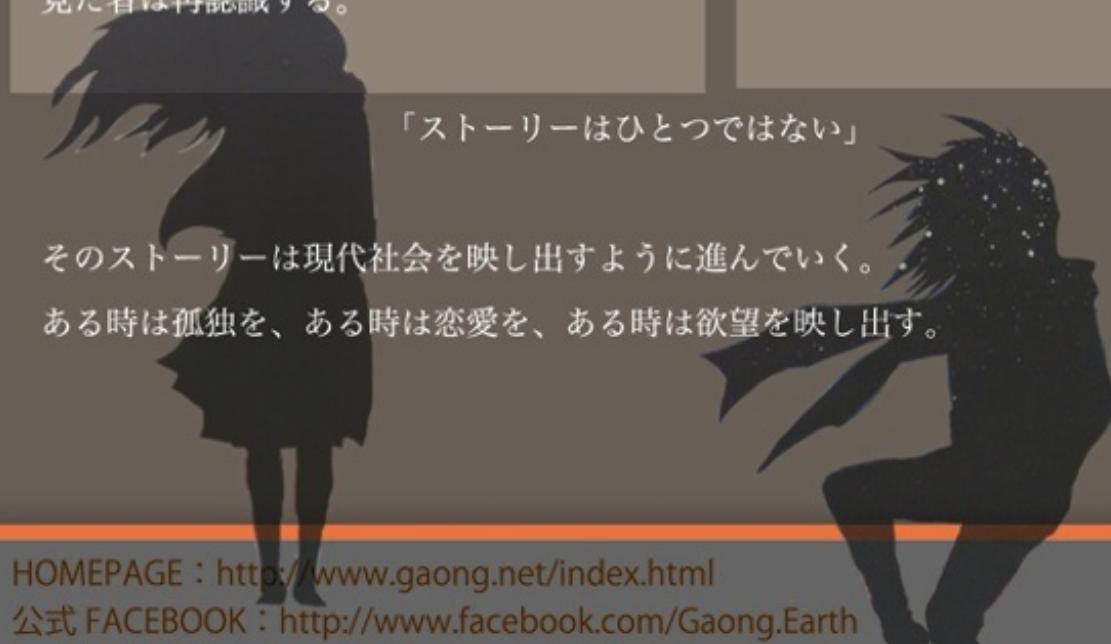
視点の誘導、色の配置、ストーリーにもう一つの可能性を見出す。

日常には漫画があふれ、より身近なものとなった漫画の美術的価値を見た者は再認識する。

「ストーリーはひとつではない」

そのストーリーは現代社会を映し出すように進んでいく。

ある時は孤独を、ある時は恋愛を、ある時は欲望を映し出す。



Homepage : <http://www.gaong.net/index.html>

公式 FACEBOOK : <http://www.facebook.com/Gaong.Earth>

公式 TWITTER : <https://twitter.com/earth2307>

BLOG : <http://gaonblog.blogspot.jp/>



〒985-0874 宮城県多賀城市八幡2丁目 20-9-103

TEL&FAX:022-762-9698

11時～20時(19時半ラストオーダー)水曜定休

徒歩 ➡ 仙台駅から仙石線で多賀城駅まで 27 分

多賀城駅(仙石線)から GAONG まで徒歩 7 分

車 ➡ 仙台駅から 45号線で 35 分



ART & CAFE
GAONG 企画
わらおびびし 個展
2012年12月13日～12月25日

新春!!

今泉バンド紅白戦ド自白 2013

1/5
January 5th
ON LIVE

RED TEAM

[紅組]

WHITE TEAM

[白組]



LUSH



Basic Grow



THE PEPPERMINT PATTY



LITERATURES



ウマンボ族の逆襲

白



白



FONDLY



といれつときっず



バリスティック



No Smoking



quarter pounder

会場：仙台 CLUB JUNK BOX
仙台市青葉区一番町3-11-15 FORUS B2F

2013.1.5(sat) open13:30/start14:00
前売：¥1000/ 当日¥1500 (SD別¥300)

●主催：TAKE UP SEED : <http://takeupseed.com/> info@takeupseed.com

紅白の投票にご協力ください。優勝チームには金一封、
MVP バンドには豪華特典が、そして投票したオーディエン
スのみなさんにもささやかなプレゼントがあります！

[GUEST ACT]
Fake Face



SENDAI INDIES MUSIC COMMUNITY

TAKEUPSEED

OFFICE:仙台市青葉区花京院2-1-18アーバンプラザ花京院303
TEL:022-215-1960 / MAIL:info@takeupseed.com

<http://takeupseed.com/>

ACCESS NOW



考えぬヒント

親方

冷蔵庫が壊れた。扉を開けてもぬるい空気しか出ない。ネットで調べるとどうも冷蔵庫内の霜を取るヒーターが壊れたのが原因らしく、そのことを報告すると「なんで冷えない原因がヒーターなのよバカ逆じやないの」と不条理に怒られた。

疲れた。この夏はほとほと疲れた。最後までこれか、と思うとまた全身がダルくなる。「素人が直すには、冷蔵庫の中身を全部出して三日くらい放おつておくしかないんだつて

「ああ面倒臭い」

「で、冷蔵庫の電源を抜いておくと自然に中の霜が溶けて普通に使えるようになるってさ」

おや、返事がないと思つてパソコンの画面から目を移して隣を見てみると、ヤツはやや溶けたハーゲンダッツのパイントカップを抱えてモリモリ食べていたので、そのまま無言で視線をパソコンに戻した。「冷蔵庫 処分

「レシピ」なんて検索すれば、冷蔵庫の余り物を効率的に消費するためのレシピが何件も表示される。こうしている間にも冷蔵庫の中に残された食品たちは確実に傷みが進んでおり、少しでも早く食べきってしまうためにもこれから三日間の献立を考えなくてはいけない。

とりあえずはクーラーボックスに保冷剤を敷き詰めて中身を移すことにする。「テキパキ移さないといけないから手伝つて」と言つたら「これ食べてから」と制された。「手伝おうか」と口を『あくん』にしたら「それはいい」とこれも一喝されてため息が出た。

そもそもこの部屋には不釣り合いな大きさの冷蔵庫だつた。四、五人で暮らす一般家庭用に作られたそれは、ヤツが一人暮らしをはじめる際に親戚から貰つたもので、要するにお古だ。「大は小を兼ねる」と言うが冷蔵庫に限つては大きくて不便なことばかりで、一番困つたのはその大きさからくる消費電力

の多さだつた。冷蔵庫の前に仁王立ちし、「ムダだ……」とつぶやくヤツの姿を何度見たか。とは言え、このサイズを持て余していたのも途中までで、いつからか僕が部屋に出入りするようになり、このバカでかい冷蔵庫も活躍の場を増やしていき、今や完全に一人暮らしの部屋で二人が生活するようになつていて。そういう意味では、冷蔵庫も最近やつと適当な仕事が与えられた矢先に降り掛かつてきた悲劇であつた。まつたく、ご愁傷さまである。

自分たちに降り掛かつた悲劇なのに他人ごとみたいに思つているのは、コトの重大さを理解できていないのと、まあどうにかなるだろうと思つてぼんやりしていることが原因か。

「ヒーターの故障のせいならいいけど、本当にそれが原因なのかはわからないし、原因が違つていたら対処もできずこの冷蔵庫はそれこそ終わりだね」などと脅してきたので数秒目をつむつて「終わり」について考えた。

しかし考へてもよくわからないのでややおどけたイントネーションで「うん」と言い返す。面倒な事を考へると気が遠くなる。献立だつて考へやしないし、どうでもよくなつてきた。ビールさえ冷えていればどうでもいいじゃない。

*

この冷蔵庫が私のものになつたのは三年前で、そのときはまだ高校の三年生であつた。「うん、そういうわけで、うん、新しいんだけど、そうなんだよ。ケイちゃんも来年から一人暮らし始めるでしょ？ その時はアパートまで持つて行つてあげるから」と、母親が話している電話口の向こうから叔父さんの声が聞こえた。叔父さんは電話で話す時の声が必要以上に大きい。電話で話している人の近くにいると、叔父さんが何を話しているのか、通話をしている人以外にも筒抜けである。少し耳が悪いのと、性格が大雑把なのが原因なのか。少し受話器から耳を離して話していた

母が電話を切ると、「叔父さん、ちょっと事情があつてあんたに冷蔵庫をくれるんだつて」と眞実をオブラートに包んで私に言つてきたが、しかし母を通さず受話器から直接聞いた話を思い出す限り、「また叔父さんが浮気をしたせいで嫁さんがついに怒つて家を出でていつて、もう関係は修復しそうになく離婚も寸前で、今後の一人暮らしに使わなそうな家電を私に押し付ける計画が進行している」ということも知つていたので、うん、とあいまいに頷いて返事した。返り血を浴びた冷蔵庫だな、と思つた。

私が大学のある隣の県に行くまで冷蔵庫は叔父さんの所で保管されたが、ついに引越しの日が来て、他の家財道具と一書に叔父さんが借りてきた軽トラに積み込まれた。泣きながら「体に気をつけなさいよ」と別れを惜しむ母に対し至つてクールにじやあねと挨拶すると私は助手席に乗り込み、これから四時間も叔父さんと何を話しながらドライブすれば

いいのか想像して暗澹たる気分になつた。ミラーを見ると叔父さんと母が話しているのが見え、ドアを隔てても「じゃあ俺責任持つて連れていくから!」という声が聞こえた。

「ケイちゃん何か飲む?」「ケイちゃんも十九だから立派なオトナだよなあ」「いやあ職場にケイちゃんに似た女の子がいてね」「ケイちゃん彼氏いるの?」

はい、いますよと言つたので叔父さんは「ああそう……」と眉をしかめた。もうちよつとマシな反応があるだろうと思つたが面倒なので黙つていた。

思えば叔父さんとしつかり話すのも小学生以来だ。私は成長したが、叔父さんは悪化したようで、信号待ちの度に視線を横に向けて私の太もものあたりをチラチラ見るので発進が遅れて何度か後ろの車にクラクションを鳴らされた。その度に私は窓の外に見える名前の知らない青々とした山を見て、ああ、きれいだなど素直に思うのであつた。春だつた。

*

ある程度の食材はカレーにしてすべて食べてしまうことにする。豚肉、ほうれん草、ピーマン。ちょっと迷つたが昨日の残りのゴーヤチャンプルーも入れる。隠し味のとんかつソースもけつこう入れる。とんかつなんてほとんどの食べることがないからなかなか減らないが、今日のカレーでやつと小瓶を使いきれった。他のソースやらドレッシングの類はクリーラーボックスに入れるとかさばるからどうやって保存しようか。

フタが空いているけど常温で保管できるだろうか。せめてもう少し涼しい時期なら置いていても良かつたのに。

冬に壊れたら苦労しないんだけどね、といながらカレーに入れないので冷蔵庫から出す。クリーラーボックスの中で場所を取らないように、立体的のテトリスをするように考えながら、作戦を立てながら出さなくてはいけないのだが、作業を手伝っているヤツはそ

のような高度な計画を理解できるのだろうか。バターの入った箱を常温に置きっぱなしにしながらチューハイを取り出して「やつぱりもうぬるくなってきたね」なんて言つていが。

今日の夜はカレー、明日の朝もカレーにしよう。昼は冷凍食品を食べてしまい、夜は卵を使いきつてしまいたい。飲み物をあまり消費しないように、味は薄めでいこう。

チューハイをウマそうに飲むヤツのことを、バターをクーラーボックスに突っ込みながらうらめしそうに見たが、視線に気づくこともなく天井を見上げてグビグビと飲みほし、プハーッというかけ声とともに缶を握りつぶした。わざと一拍開けてから「おいしい？」と聞くと、「うんおいしい」と満面の笑顔で答え、そのうえ「さあどんどん冷蔵庫の中身を減らしていくよ！」などと言うのだから僕は蛙の断末魔のような声でうんという

よりほかなかつた。

*

いまだに軽トラには椅子や扇風機、ダンボールに入つた私の本を始めとした沢山の家財道具、それからなによりも冷蔵庫が積まれたままなのに私は横になつていた。今日から住む部屋には姿見とラジオと布団の三つしか入つておらず、決してそんな段階で裸になることは許されない。

叔父さんは下半身を丸出しにしているのに軍手を外し忘れていた。その事が可笑しかつたがわざわざ口に出して指摘することも面倒で、私は黙つて叔父さんの顔を眺めていた。三十五歳の肉体は、若い。今まで抱き合つてきた中ではもつとも古い身体だが、むしろ叔父さんの肉体は引き締まつて感じた。ヒヨロヒヨロの若い男とは違う。筋肉と汗の感覚が不思議で指先で撫でるとその張りに驚きさえ感じる。しかしそれが興奮に繋がることはなく、むしろスースと頭から熱気が冷めていく

感覚が不思議だつた。

それにしても、「ケイちゃん、おとなになつたね」はパンツを脱がせながら言うセリフではないだろう。電話越しには大声を出す癖に今は小声で囁く。

私の股間に顔をうずめてペロペロと舐める叔父さんを見て、私は「もう、やめましよう」と言つた。叔父さんの必死な顔を見て、私は完全に冷めた。しかし叔父さんは「いやだ」と妙に落ち着いた声で返事し、顎先を私の腹にすべらせながら胸のあたりまで顔を近づけてきた。無精ヒゲが私の体沿いに滑る感覚は、硬いハケの毛先で掃除されるのに似ている。ハケで体を洗われたことなんてないけど、多分きつと、こういう感じだ。

叔父さんの頭は汗臭い。妙に艶のある黒い髪がすーっと視界の下から上に抜けていき、ぬつと現れた顔が私の頭を覆つた。息が顔にかかる。ゆつくりと唇が近づいてきて、私に触れそうになる。あんまり怖くない、けど、

嫌だ。

「違う」
「何が……」

自分で言つておきながら、何が違うのかはわからない。ただ何かとても不自然な感じがして、もしかしたら少なくとも自分はここにいることが認められていないのではないか、と不安に思つた。

叔父さんの口はぬるくて、人工的な味がある。海の水はしょっぱくてプールの水は苦いが、味とは別に人間が作った不自然な風味がするよう、叔父さんの口は作り物の刺激がある。洗剤をきちんと洗い流さなかつた食器で食べるごはんの味に少し似ている。煙草を吸う人とするのは初めてで、それに、こんなに落ち着いてキスをする人も初めてだ。今までどいつもこいつもサカリのついたネコみたいにペロペロ舌を突っ込んでくるようなガキばつかりと遊んできたせいで、落ち着きなど感じたことがない。上唇の右側を優しく噛

まれながら目をつむり、遠くを見る。この部屋の天井の高さがまだよくわからない。

それでもやっぱり嫌なものは嫌で、私は叔父さんの首のあたりに手を回して押しのけようとする。しかし叔父さんの体はビクともしない。力を入れて踏ん張っている感じはしないのに、どうしてこうも動かないのか。叔父さんの肉体はコンクリートか何かでできているのかもしれない。

しようがないので首に指をあてがつたまま力を込めてみる。首、皮膚、喉周りの凹凸に指を這わせて、力を微調整しながら反応を見る。もうどうにもならないかもね、という感情が頭の中を半分支配している。体温が吸われるのとともに意識も叔父さんの口に吸われていくような気がする。

最初に喉仏が動き、それに合わせて太い二本の筋が張る。ツバを飲み込む動きがよく分かる。親指だけに力を込めて喉仏をつまんでみると、すぐに逃げるようにするりと指から

離れた。大きな叔父さんの体の中で、小さな本体が動いているようだつた。

急に叔父さんの口が動かなくなつて、私は不思議に思つたけれども喉の動きに集中していたのであまり気にならなかつた。数秒経つと喉も動かなくなつて、「あ、これはまずいかな」と思つて目を開けたら叔父さんも目を大きく大きく見開いていた。

さつきまでの余裕を感じさせない、まんまるの、逃げ出したネコのような目だつた。

*

『僕もヤツもひどく酔つていたことは覚えている。ぼんやりした記憶が残つてているのはたぶん昨晚のどこか一箇所を切り取つたシンで、まるで YouTube にアップロードされた映画のクライマックスだけを見ているような、そういう不自然な感覚だ。

僕はヤツの首を絞めていた。ヤツはかすれた声で「もっと、もっと強く」と言い、僕はそれに答えるようにより強く手に力を込め

た。自然と手の先は上へ上がり、両手でヤツの首を掲げるような姿勢になる。目をつむつたまま頸を引いて無理矢理に力を込め続けた。

「ねえ、ねえ」という声が聞こえて目をうつすら開けると、つま先立ちをするヤツの足の先が見えた。

僕は急に不安になりヤツの首から手を離すと、なぜだかわからないが、急に自分の手が不潔になつたような気分になり、パジャマのズボンで手のひらを拭つた。僕の手はもしかして腐つたんじゃないかな？ そんな不安がして仕方がない。

ヤツはしばらく下を向いて荒い息をしていた。はあ、はあ、はあと呼吸にあわせて小さな肩が動き、僕は同じリズムで手をグーパー、グーパーと動かす。手は腐っていない。大丈夫だ、と自分に言い聞かせる。

「そんなもんじやないでしょ」

ヤツが急に落ち着いた声で言つた。低い声だつたが、どこか高揚感の籠つた、攻撃的な

声。目尻にはうつすらと涙が滲んでいた。
「あんたもつといけるでしょ……」

「泣くなよ」

「ガツカリさせんな」

そう言うとヤツは勢い良く僕の首に手を回し「あんたはこうだよ」と言いながら一気に力を込めた。細い指は冷たく、爪の先がわずかに首の先に食い込む。

手は、おそらくヤツの出せる最大の握力がかかつっていた。しかしそれでも、それほど僕の呼吸は圧迫されず、むしろ抱きしめられたような一種の安心感すら思い浮かんだ。

「なんか」

「何よ」

何かに似ている、と思つた。ヤツの顔を見ると目尻にはうつすら涙が滲んでおり、それをじーっと眺めていると、なぜだか僕も寂しくなつて泣きそうになつた。

「……首輪？」

「違う」

「離すなよ……」

「離さない」

「よろしく』

それでどうなつたんだつけ？

「よろしく」と言つたことまでは思い出せたが、その後どんなやり取りがあつたのか覚えていない。そもそもこの出来事があつたのが二年ほど前の春頃だつたと記憶しているのだが、それすらも明確ではない。

このことを急に思い出して、冷蔵庫の中を探る手を一旦停めた。ヤツに聞けばこの事を覚えているかもしれないとは思つたが、しかしそれは聞かないことにして、また手を動かし始めた。

*

別に、大した意味もなく首を絞めたのに叔父さんはたいそうショックを受けたようで、余裕綽々だつた優しい目は今や私を睨んでいる。しかしすぐに私に気を使つたとみえて、目が合うとすぐに視線を下に落とした。私の

足の爪先あたりを睨んでいるので、ねえねえ、なんて話しかける時の手つきのように指の先をクネクネ曲げてみたが、叔父さんは何も反応を示さなかつた。布団の上で向い合い、小学生みたいに体育座りをする。

『悪かったね』と、あまり反省した感じもなく言う叔父さんは、まだ自分が優位に立っている気なんだろうが不機嫌そうで、今にも襲いかかってきそうな気配がある。しかし「こちらこそ」なんて他人行儀に謝つてみると、うむ、なんて言つてあつさり眉間の皺を消した。

それからは何事もなかつたように服を着て、残りの荷物を全部部屋に積み込んだ。夕方までかかつてそれを全部片付けると、「じゃあね」と言って叔父さんはスタコラ帰つていつた。幸いなのは叔父さんが「お母さんにはこのことを絶対に黙つていてね」などと格好悪すぎることを言わなかつたことで、それ

でようやく、私がかつてランドセルを背負つていた頃に叔父さんことを本当に好きだったことを忘れずに済んだ。記憶から抹消するまで、あと一步のところだつた。ただ、どうして叔父さんとセツクスする流れになつたのかは思い出せなくて、ほんの数時間前のこと

を忘れるのも困つたものだと思った。

でも、本当に他愛もない、どうでもいい空気がそうさせたんだと思う。今までもそうだつたし、今回もそうだつた、たぶん、これからもそうなのだ。

冷蔵庫のプラグをコンセントに刺して起動させてみる。低い音がして中の機械が動き始めた。無機質な材質で作られたボディーを指先でなぞると叔父さんの胸板と同じ感触がしてすごく嫌だ。平坦なのにハリがあつて硬い。冷蔵庫のドアを開けると、黄色がかつたオレンジの光に照らされて中に説明書と保証書が入つていた。別々に運ぶと失くすかもしれないから、とこうやつて中に入れて運んでき

たのだが、それにしても冷蔵庫に冷やされには不釣り合いな代物だ。

保証書の表面には、五年後の日付が書き込まれており、その下に小さく「有効期限」とプリントされている。五年後、私は何をしているだろうか。想像もつかないが、なんとなく、大学を卒業して行くアテもなくふらふらしている自分が想像できた。五年後にブツ壊れていても、もはや返品や修理が効かないのは私も冷蔵庫も同じだろう。

からっぽだつた部屋が、荷を解いていくごとに少しづつ人間の住処になつていく。中でも劇的なのはテーブルだつた。何の変哲もなない茶色のテーブルだつたが、部屋の真ん中に置くだけで一気に人間臭さを増す。黒澤明の映画に三船敏郎が登場した時の衝撃のようで、テーブルは部屋の中で大俳優であつた。後ろを振り向くと乱れた布団が見えるはずだつたが、それはまた別の意味で人間臭すぎで嫌なので、見ない。今はテーブルの余韻に

浸りたかった。

一人暮らしつてこういうものなのだろうか？ 叔父さんは教えてくれなかつた。

*

いよいよ冷蔵庫が空になり、電源を抜くと、それまで二十四時間ずっと僅かに鳴り続けていた低い動作音が消えて不気味な静寂が流れた。「死んだみたいだね」と言うと、「私、おじいちゃんが亡くなつた時の体を思い出した」と返された。

「おじいちゃんは冷たくなつてたのが変に思つたたけど、冷蔵庫は冷たい空氣を出していないと気持ち悪いね」

ついでだから、そのまま冷蔵庫の仕切り板を取り、中をすべて掃除する事になつた。仕切り板を外すと死体になつた冷蔵庫はただの長方形の箱になり、ますますキヤラクター性を失つた。「あれみたいだね、棺桶」と、ヤツが言う。どうもお葬式に結び付けたがるらしい。縁起は悪いが気持ちはわかるのでや

る気なく「うん」と言うと、「入つてみる」などと恐ろしいことを言つて、ヤツは尻から冷蔵庫の中に入つていつた。

小柄なヤツの体は体育座りをすると冷蔵庫にすっぽり入つた。……とはいからず、体育座りした足の爪先が冷蔵庫の前面からちよこんとはみ出た。「出るね」「うん、出る」「私が死んだら、足を切斷してもいいから冷蔵庫に入れて葬つてほしい」

「……お前の死体を保存しろつてこと？」

「それでもいいや。よろしくね」

僕はヤツの死に悲しみながらも、スープの出汁を取るためにヤツの肉体を冷蔵庫から少しずつ失敬して使わせてもらう様子を想像した。全然面白くなかった。

「まあ、でも保証期間内に壊れてよかつたよ」確かに、この作戦で冷蔵庫が直らなかつたとしても、ギリギリ保証期間内であるから無料で修理はしてもらえる。危ないところであつた。新品を買う余裕はないし、かといつ

て冷蔵庫なしで生活するなんてことは出来ない。

ところがヤツの顔を見るとあまり嬉しそうではなく、むしろ神妙な表情でつま先のあたりを見つめているので、どう声をかけたらいいのかわからず僕も自分のつま先を見た。特にこれといって面白いことがつま先に起きているわけでもなく、人生とはままならないのだなあと思った。

*

二十歳になつて叔父さんにお酒を貰つた。

電話越しにまた「大人になつたね」と言われたが、ええそうですねとしか答えられなかつた。それから高そうなシャンパンが郵送で届いたが、飲みたくないなかつたので冷蔵庫の一番上に放りこんでそのままにしている。一番上の段は高くて、何か踏み台を使わないと私は手が届かない。だから叔父さんにシャンパンをもらうまでは脱臭剤しか置かず、中身が入れ替わることはなかつた。

私は分厚い漫画雑誌を四冊重ねてその上に爪先立ち、シャンパンを封印した。脱臭剤をストップパーのようにシャンパンの手前に置き、それから湿気つて処分に困っていた海苔を毛布みたいにかぶせた。

あとからネットで調べたら、そのシャンパンが大変高価なものであることに気がついた。ちょっと惜しい気持ちになつたが、飲みたくない気持ちは絶対的なものなのだから仕方がない。マルが四つ並んだ値段でも、気にしない。

いつかこの封印を解いて飲みたくなる時が来るのだろうか？ どうも実感がわからない。自分が解くには重すぎる呪縛だと思う。叔父さんの呪縛を解いてくれるのは、たぶん、叔父さんに似た叔父さんではない人で、自分ではないだろう。

*

キュウリの梅肉和えとアサリの酒蒸しが今宵の肴である。カレーの残香が口の中に僅か

に残っているのが気に入らないが仕方がない。

冷蔵庫の一番奥にシャンパンが入っていることに気がついたのは、クーラーボックスへの移動が終わる寸前だつた。脱臭剤の奥に見覚えのない瓶が入っていることに気づいて「なにこれ」と言つてみると、ヤツは夜道で出会つたネコのように目をキッと見開いてそれから目をそらした。直感的に、なるほどこれは一人でこつそり飲もうとしたものだな？

と気がついた。僕の超人的洞察力の前ではこのような小細工はムダでしかないのだ。

じゃあ、とヤツが前置きをしてから「いっしょに飲もう」と言つた。どういう意味の「じゃあ」なのかは、わからぬけれども。

月も出ていなければ雪も降っていない。横目でチラチラ冷蔵庫を眺めながら酒を飲んでいると「冷蔵庫見酒？」と言つてきたが語呂が悪いのでその名称は却下した。居間の、食事の時僕が陣取る椅子に座ると、首を少し

傾けるだけで台所が見える。

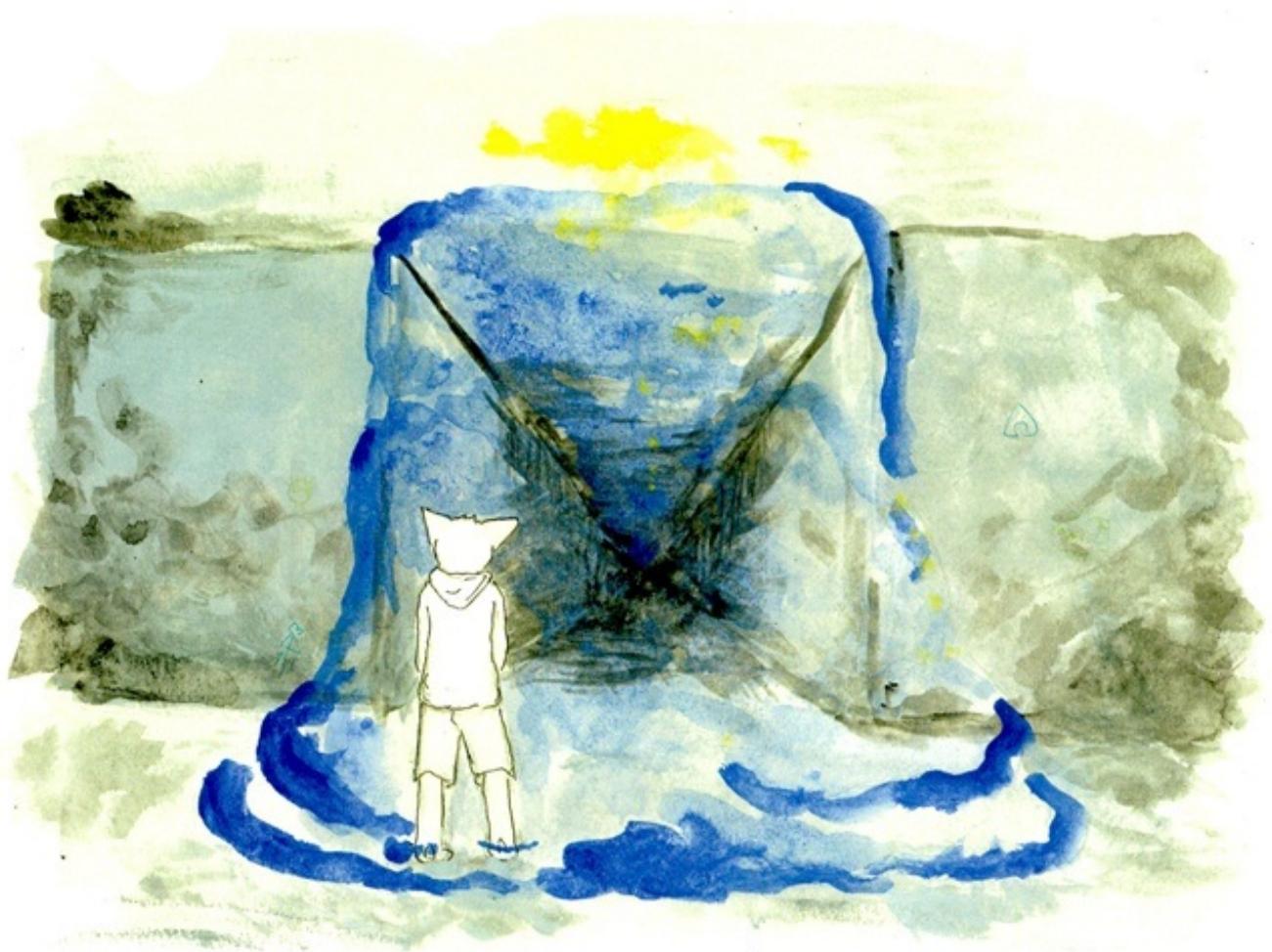
誰も居ないので電気が落ちて暗くなつた台所の中、冷蔵庫の白いボディーが僅かな光を反射してよく見える。霜さえ取れれば直る、と思いたいが実際の所どうなのだろうか。ヤツが言うようにもう、直らないのかも知れない。その時の覚悟はどうしておけばいいのか。隣を見てもヤツは何も言わない。なぜならアサリの酒蒸しを「熱つ熱つ」と言いながら頬張つていたからだ。

いろんなことを思うが、横顔を見ているとなんだか面倒になつて、真剣に考える気がなくなる。探るのも嫌だし、知るのも面倒だ。ヤツが何を考えているのかも、冷蔵庫も、明日の予定も知つたこつちやない。

たぶんきつと、どうにでもなるのだ。

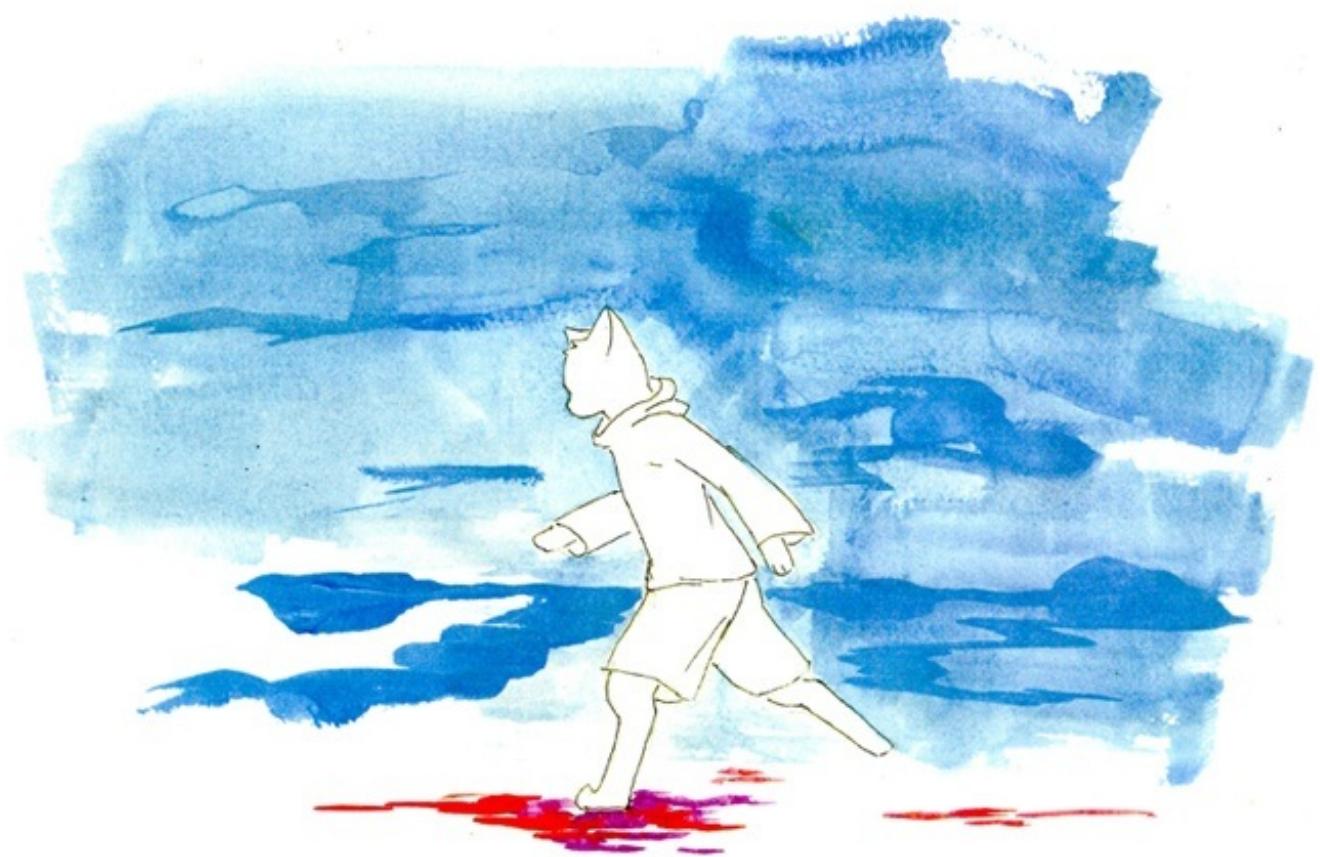


細萱航子





このオバケを抜けた先には
財宝があると言います



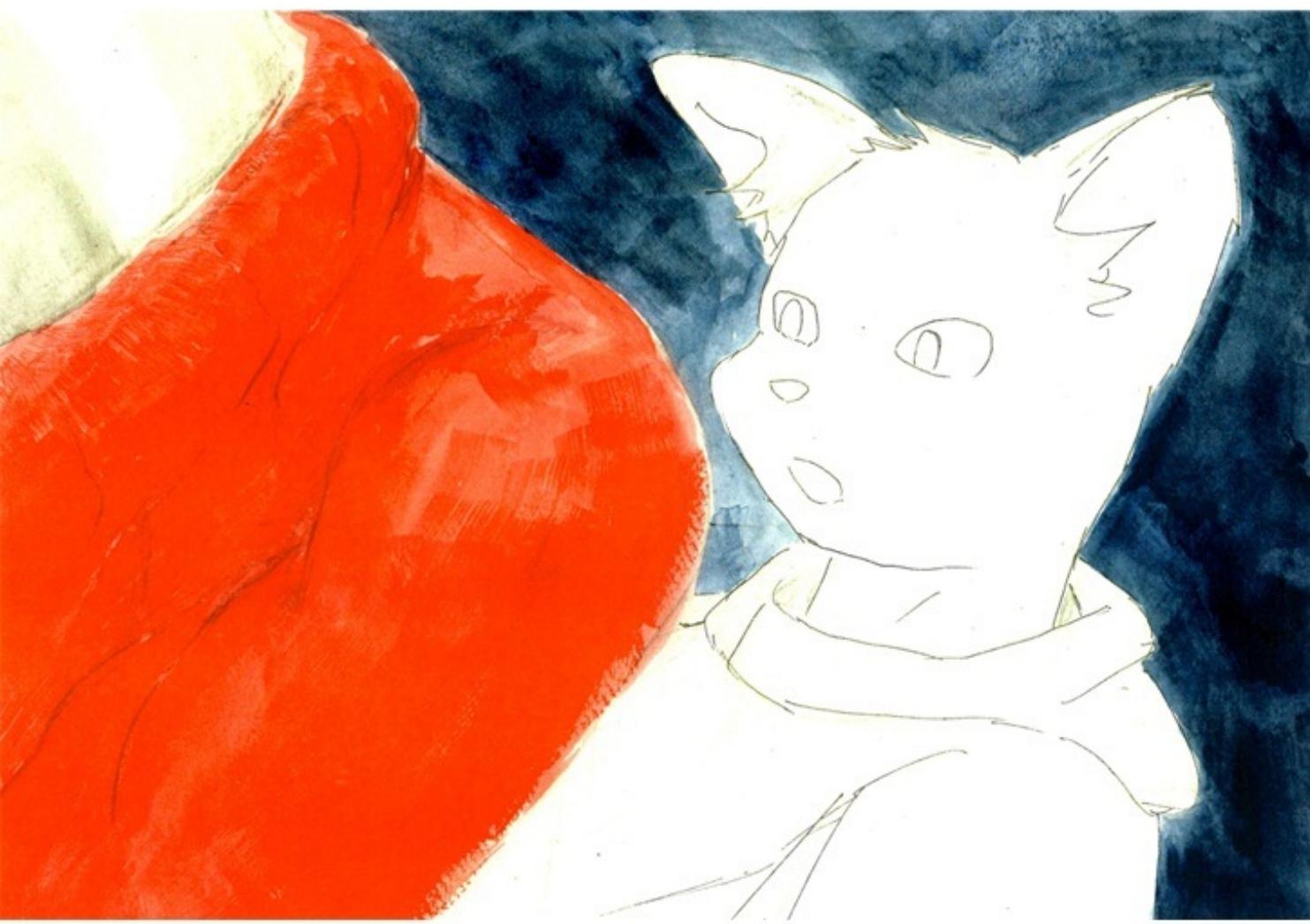






しかしオバケは寒くて私には無理でした







ですから

砂漠を駆け抜けるバイクの後ろに乗って
逃げ出しました





今日はとても月が大きく見えます

おわい

とある山奥の動くことを止めた遊園地「カーニバル」
かつて夢があふれたこの場所には今、様々な人が住みついていた。
夢を追う者、夢やぶれたもの。

そんな人々が、マイペースに生活している。



CARNIVAL

Tour.7 「ヘッドスタートフォアハピネス」

ヒラチ フミタカ

☆此の作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには、いっさい関係ありません。

電車も乗る

由芽ちゃん
ムサシに会うのは
初めてかい
園の裏にある神社で飼
われているんだよ



しゃべる



あの神社とは開園当時から
モメたもんだつたけど
ねえー…

園長さん！



しゃべった！

なにか御用でござるか？



ムサシはその頃から
よく遊びに来てたんだ



こいつ
ホントに猫なの!!?



ひあ
ういーーー

ジェットコースターが好き
で良く乗つてた。

にや…
ニヤンりんがる！

騒がしい
でござる

ハツ…!
よく見ると…!

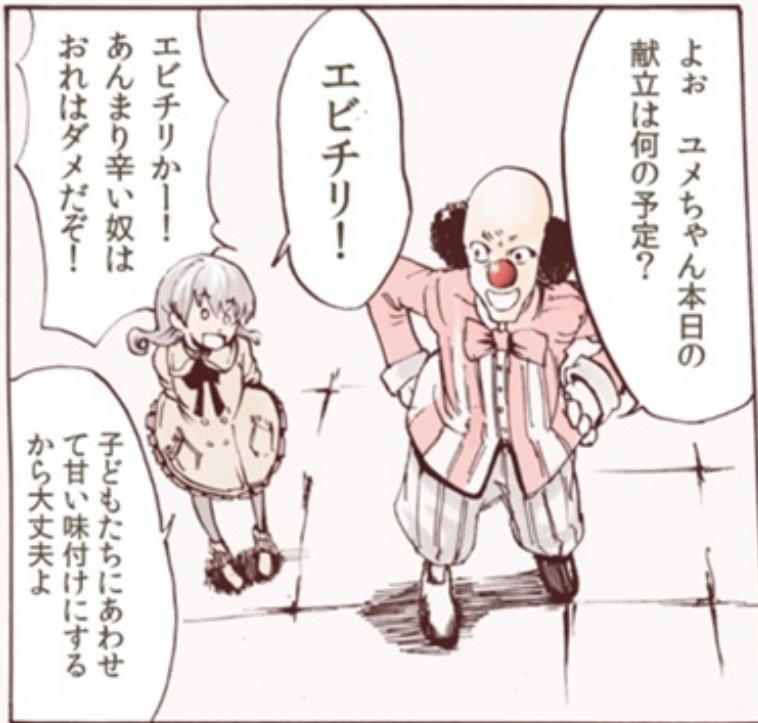


今日は十二月二十五日
私がここに来てだいたい
一年になろうとしている

みんなは今近くの児童養
護施設のクリスマスイベ
ントの準備中です

こういう活動もして
るのも最近知つたけ
ど、けつこうみんな
楽しそうねー

キヨロ



frankly AFTER OF EDIT.

2012年12月1日 Frankly Freepaper No.4

編集後記



けいた
表紙イラスト／カレンダーイラスト

twitter : @dattaranannano (おた(v^) オナイ)



個展広告

わらおびびし

twitter : @waraobbc



小説「考えぬヒント」

親方ちゃん

twitter : @oh_yakata_c

メチャクチャ怒られました



カーニバル／デザインまとめ

ヒラチ フミタ力

twitter : @Fumitica

広告に協力してくださった TAKE UP SEED さんに感謝です。
フリーぺーぺー、だいたい一周年です。

frankly information

twitter : @frankly_info

法兰クリーフリーぺーぺー No.4 を読んで頂きありがとうございます！一年間続いたのでたぶんこの後も続きます！
次回は4月1日になるかと思います
フリーぺーぺーに関してご感想、ご意見お待ちしています！それでは！
Mail : franklyex@gmail.com

